

## 「わたしが命のパン」

ヨハネによる福音書 第6章34節～40節

説教 岡村 恒牧師

この日、主イエスはご自分の前に立つ一人一人の顔をながめるようにして言われたに違いありません。「わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない。」(35節)

この日、この言葉を聞いた人々は、誰一人として、自分が何に飢え、何に乾いているかよく分からないでいました。本当に必要な糧についても、飲み物についても全く理解しないまま、「主よそのパンをいつもください。」と主イエスに求めました。ただ主イエスだけが、私たちに無くてはならない食物についてご存知でした。

主イエスのもとに押し寄せて来た多くの人々は、満腹した日のパンの味を思い出しながら、期待に胸を膨らませていました。五千人が満腹した食事の奇跡物語と、主イエスの受難物語は、4つの福音書の全てに記されています。5つのパンと2匹の魚で満腹した大勢の人々は、あの日の出来事を忘れることができなかつたのだと思います。この日も、人々は主の言われるくまことのパンが欲しいと思いました。

今日、礼拝に集う私たちも、彼らと同じような思い違いをします。自分が本当に必要としているものが分からず、直面している問題の解決や、目で見て手で触れることができる助けを求めて主イエスに言うのです。「主よ、そのパンをいつもください」と。人々は、神のパン、天から下ってきて、この世に命を与えるまことのパンを繰り返し手に入れたいと思いました。荒野で40年間神によって養われた先祖たちに憧れを抱きながら、主イエスにパンを求めたのです。

主イエスがわざわざ、「わたしが命のパンである」と宣言された時、主イエスはもう既に、これから先の出来事を見据えておられました。「わたしが天から降って来たのは、自分の意志を行うためではなく、わたしをお遣わしになった方の御心を行うためである。」(38節)と言われたのはそのためです。主はこの同じ言葉を、十字架を前にしたゲッセマネの祈りの中でも口にされました。十字架の死という苦しみを目前にして、それでも父の御心だけが実現するように、と祈られたのです。

父のみこころを行うため、父が与えて下さった者を生かすために来た、と主イエスは言われました。私たちの目の前にご自身を差し出して、

わたしが命のパンだと言われたのです。

「天から下って来た」という言葉を聞いて、主イエスのご両親や家族のこともよく知っているガリラヤ地域の人々はつまずきました。あのナザレ村のイエスが、神様のことを繰り返し「わたしの父」と呼ぶのを聞いて、ユダヤ人は怒りました。しかも、〈終わりの日〉の話をして、「わたしがその人を終わりの日に復活させる」という言葉を聞いて、さらに多くの人が主イエスの元から去っていきました。一言一言が、私たちの期待や常識を越えて、私たちに本当に必要な命だけを指さしています。私たちの思い違いと無理解を前にしても、なお主イエスは宣言して下さるのです。あなたは、「父がわたしにお与えになる人」、「わたしに与えてくださった人」だ、わたしがあなたに命を与え、終わりの日に復活させる、と。

私たちが本当に生かすものは、目で見、手でふれることができる食物や飲み物などではありません。主イエスの口から出る、約束の言葉だけなのです。今朝の御言葉の、「決して」、「皆」「一人も失わないで」と繰り返される言葉に、主イエスの固い決心、確かな約束の宣言が響いています。主イエスは、父なる神に召された者を、その手に固くにぎりしめて下さるのです。

「わたしをお遣わしになった方の御心とは、わたしに与えてくださった人を一人も失わないで、終わりの日に復活させることである。」(39節)「一人も失わない」、これが神様のみ心なのです。これは本当に驚くべきことです。やがて終わりの日、私たちは主イエスと同じ、栄光の姿に変えられ、永遠の命を持つ者として神の前に立つのです。このためにこそ、主イエスは人間となって地上を歩み、十字架にまでお架かり下さいました。

聖餐式のたびに、主イエスが十字架と復活とを通して、信じる者に永遠の命をお与え下さったことを思い起こします。私たちの魂の奥底に、命のパンが与えられていることを知るからです。主イエスを信じる者は、飢えることなく、乾くこともなく、永遠の命を生きるのです。これは、神ご自身の御心、主イエスの確かな約束です。

(記 岡村 恒)